

～ 抄 録 ～

〔論 説〕

進路指導講座とインターンシップ制度について

影 山 僖 一

社会科学の目的は、人間の言動を研究し、人間の作り出す組織と制度の役割を解明し、組織の中で生きる人間の生きがいとそれを実現するための組織改革と制度変革の手段を発見することにある。換言すれば、人間生活の基本的なベースとなる組織と制度の本質と機能を研究し、組織と制度を人間生活に役立つものに変革していくための体系的知識が社会科学といえよう。そうした目的の実現に向けて、社会科学系大学においては、講座のカリキュラム、教育方式、教員の教育に対する心構えに関する早急な再点検が求められている。わが国文部科学省の推奨する大学自体による自己点検、自己評価も、社会科学系学部教育の意義と役割を明確にすることにより、その成果に格段の向上を期待することが出来る。

社会科学教育の第一歩は、学生の入学時に、社会の仕組みを確認し、学校という一つの組織における学生の役割と生活目標を提示し、効率的な勉学方法を提示する進路オリエンテーションの実施である。そうした一般的な進路指導に加えて、学生に対する個別の教育相談の拡充も求められている。学生が自分の適性と適職を発見し、適職に従事出来るような進路を提示し、そのための心構えを教え、職業に必要とされる知識と技能の養成に向けたサポートが大学の基本的な役割である。インターンシップは、進路指導を徹底して効果を挙げるための一つの手段にすぎない。

本稿では、社会科学系学部における進路指導の役割を提示し、目標達成に向けた筆者の体験と見解を紹介する。そこでは、進路指導の一環としてのオープン・インターンシップの意義が強調され、千葉商科大学就職部委員会において推進している大企業を中心とする企業派遣方式とそのため専任教員をはじめとする関係者の努力と成果が紹介される。

イエスと仏教

柴田 秀

いうまでもなく、イエスはキリスト教の教祖にほかならない。したがってキリスト教は、当然イエスの思想をそのまま受け継いできていると一般に思われている。ところが実は、そうではない。

私見によれば、伝統的西洋キリスト教は、主としてパウロのいわゆる十字架の神学を継承してきたのである。パウロの思想にはしかし、その十字架の神学と混在しつつ、西洋キリスト教によっては「神秘主義」として切り捨てられてきたもう一面の思想が含まれている。そしてそれこそ、むしろイエスの思想に近いもの、いや恐らくパウロがイエスから正しく受け継いだものなのだ。

この、「神秘主義」としてパウロに継承されたイエスの思想を念入りに探っていくと、われわれはそこに、たんにキリスト教のみならず、それとは一見まったく異質に見える仏教思想をも包摂した真に普遍的な思想に逢着するのである。

かかる視点に立って本稿では、イエスの思想と仏教思想とを、その根本的一致点に標的を絞って説明してゆこうと思う。

WH-Movement and the Interpretation of Multiple Interrogation

OGURO, Takeshi

この論文は、Boškovic (1998a, 1998b) の提案する、「WH移動を伴う多重WH疑問はペアリスト解釈を強制する。」という一般化を扱う。この一般化は、WH移動が義務的である英語においては多重WH疑問文がペアリスト解釈が必ず要求され、WH移動に関してのそのような要請のない中国語や日本語に関しては多重WH疑問文がシングルペア解釈を許容する、という事実を正しく捕らえる。本論では、この一般化を検討する。

この一般化は、Watanabe (1992) の「日本語はWH演算子の移動が義務的である。」という分析の前で問題となる。本論では、Hornstein (1995) の関数的解釈に基づく多重WH疑問文の分析を応用し、Boškovicの主張とはことなり、移動の有無に関わらず、WH句全体が [Spec, CP] を占める場合のみペアリスト解釈が義務的となると提案した。また、再述代名詞を伴う英語の多重WH疑問文や長距離かきませを伴う日本語の多重WH疑問文の解釈の可能性をもとに、この提案が経験的に妥当であることを示した。

Hawthorne's Struggle for a Masculine Identity in "The Custom-House"

OHNO, Misa

『緋文字』の序文「税関」は、ホーソーンがセーレム税関に勤務した3年間を描いた自伝的エッセイである。そこには、近代的な家族形態が出現し、性別による役割分担が強化される一方で、作家という職業が女性的なイメージを与えられがちであった19世紀前半のアメリカで、男性作家ホーソーンが持っていた、ジェンダーに対する複雑な感情を読みとることができる。作品には、社会に受け入れられているジェンダーの基準から逸脱しているホーソーンの姿が見られると同時に、社会が男性らしいとするものと自分自身をなんとか結びつけようとするホーソーンの姿も見られるのである。本稿は、歴史家によるアメリカの家庭生活についての研究や、ホーソーンの伝記を参照しながら「税関」を読み直し、ホーソーンがジェンダーに対してどのような態度をとったかを考察することを目的とする。

Current Copula and Negative Questions: When We Use Them... Ways to Teach Them...

CLANCY, Thomas M.

第二言語学習において、学習者は外国語の表面的な要素しか教えられないことが多い。彼らは、様々な文法上の語類を識別することや、様々な語の発音方法を教わったり、さらには、教師が覚える価値があるとみなす様々な発話を練習する機会を与えられたりする。しかし、その発話の機能（いつ、どこで、なぜ、どのようにして）は、教師からは見過ごされ、学習者には理解されないことが多い。

このことを示す良い、しかし教えるのが難しい例として、現在連結詞（current copula）と否定疑問文（negative question）の2つが挙げられる。これらは、五感に対する刺激への直接的な結果として発話されることが多い。つまり、英語の現在連結詞（current copula）および否定疑問文（negative question）の言語機能は、個人の目、鼻、耳、口、皮膚への刺激の結果もたらされる類の発話であることが多いのである。

以上を踏まえ、本稿では次のことを目的としている。まず、自然な、現実に使われている現在連結詞（current copula）および否定疑問文（negative question）を教授する方法を日本で活動している英語教師に提供する。次に、これらの発話の機能を浮き彫りに

する。そして、最後に、教える発話の背後にある動機についてわれわれ教師が深く考察し、その上でその知識を生徒に伝えていくことを奨励する。

〔研究ノート〕

倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—

浅井茂紀

この論文は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節倫理学とは何か—人間の行為の原理を研究する学—、第2節なぜ倫理学が必要か—人倫と理法の学における価値—、第3節ソクラテスの「汝自身を知れ」—西洋倫理学の創始—、第4節プラトンの哲人政治と善のアイデア—四元徳とアイデア論—、第5節アリストテレスの倫理学(実践哲学)—観照と中庸—、第6節イギリス経験論—経験について—、第7節大陸合理論—理性について—、第8節ドイツ観念論—カントの善意志について—、第9節キリスト教—愛について—、Ⅲ結論(注付)、から成立している。

倫理学(Ethics)の語源、「倫理学」の訳語(井上哲次郎)、倫理学の概念も説明した。孟子も「聖人は、人倫の至りなり。」(離婁上)と述べた位に、倫理、人倫や人道の言葉だけでも難解な問題であるが、西洋倫理学と関連して、人間の行為の原理を考察してみた。これら倫理学を分析や総合し、その全体的な体系付けをして、その中身の意義と価値を考慮した—研究論文である。

〔資料〕

清言小品『小窓幽記』解説 —「醒」の部から—

郭 莉 莉

人々を警めるための格言が収録された『小窓幽記』は、陳繼儒(1558~1639)によって編纂され、出版当時、文人ならびに一般の人々に歓迎され好評を博した。『小窓幽記』は格言を綴る形式を用いた、晩明の「清言」作品である。「清言」という形式の著作は南北朝の『世説新語』から始まり、唐代と宋代には禅僧、儒者の語録作品が数多く存在す

る。明代の末期になると、性霊の表現を追求する文学風潮の影響で、独特かつ文学価値の高い「清言」作品が続出した。

『小窓幽記』の他に、陳繼儒の「清言」作品には『岩棲幽事』、『安得長者言』、『太平清話』、『狂夫之言』などがあり、同じ「清言」の作者に大きな影響を与えた。

明代や清代の「清言」作品の中で一番広く知られているものは『菜根譚』であり、版本の違う日本語注訳を入手することは容易である。それに比べ、思想内容や文学形式の面から見てもそれに価値相当する『小窓幽記』の解釈は少ない。本稿は第一章「醒」の部から20条を選び、注訳を付ける。